

# 博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	野田 眞理 (ノダ マリ)
在住国名	アメリカ
所属・役職	オハイオ州立大学・東アジア言語文学科
招聘回(招聘研究期間)	第12回 (2018年3月1日～2018年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	「外国人による日本語弁論大会」半世紀の受賞者スピーチから探る弁論の形、日本に向ける視点
研究目的	外国人による日本語の弁論に焦点をあて、スピーチというジャンルの形態を明らかにし、日本文化に対する視点や姿勢、表現を、パフォーマンスカルチャーの概念を用いて分析するものである。今年度で58回を数える「外国人による日本語弁論大会」の上位入賞スピーチの SCRIPT、音声、映像を通時的に検証し、50年の流れの中で見られる視点の変化(または均一性)や、受賞で認められた表現法の特徴を明らかにし、いわゆる「日本の文化」を形成する概念、弁論のかたち、さらにその変化を追う。
<p>研究成果概要:</p> <p>外国人による日本語弁論大会は、1960年から毎年行われ、今年(2018年)が第59回となる。58回までに、80の国と地域からの551名が、本選でスピーチを行っている。本研究の主たる活動は、この大会を第1回から主催している国際教育振興会の協力を得て、過去の大会の記録と大会関連資料を閲覧し検証することであった。国際教育振興会の「外国人による日本語弁論大会」事務局(以後「事務局」)では、過去の大会の本選参加者の応募原稿や大会当日の様子がNHK ラジオ、テレビで放送、放映された音声、画像の一部を保管している。研究活動は存在する資料を整理し、分析できるものを特定し、分析できるデジタルファイルを製作することから始まった。第1回の資料は残念ながら残っていないが、第2回目以降については相当量の資料が存在する。弁論のSCRIPTは、出版されているもの(第2回～第20回までの一部)事務局が保管しているもの(第33回～第58回の310)を合わせ約400にもなる。その中から、第1回から第57回までの大会の1位、2位入賞スピーチ114のうち、第5回から第58回までの76のスピーチについて、動画(58)あるいは音声(18)の記録を特定することができた。27の国や地域から参加した弁者による、この76のスピーチパフォーマンスが本研究の対象となった。上位スピーチに限ったのは、応募者の中から本選に残り、さらにその中から優秀と認められたスピーチは、聴衆、審査員の心を動かした何かを秘めていると考えたからである。入賞には漏れたスピーチにも優秀なものはあったが、上位2つに絞り込むことにより、「優秀と認められたスピーチパフォーマンス」を特定できたものとする。</p> <p>パフォーマンスの記録とスピーチ原稿に加え、過去の大会の実施要領(第2回から第59回までの15回分)、大会プログラム(第5回から第58回までのうち58回分)、大会事務局が製作し、毎年アップデートしている大会の基礎資料(エクセルファイル)を、許可を得て閲覧し、大会事務局の現在の担当者との面談を行った。また、今年度の大会に審査員として参加し、原稿を見るだけでは決して感じられない、発表者と聴衆のパフォーマンスを目の当たりにすることができた。</p> <p>上位スピーチの文字化、音と映像の特定化を進める一方、研究に関連した文献の検証も進めた。早稲田大学図書館は非常に充実しており、これらを訪問学者として使えたことは非常にありがたかった。</p> <p>「外国人による日本語弁論大会」そのものに関する資料は非常に限られており、スピーチ原稿(あるいはパフォーマンス音声の文字化)を抜粋掲載しただけのものが1992年までに5冊あるのみである。しかし、弁論に関するものや弁論パフォーマンス中の聴衆との「対話」に欠かせない「笑い」をテーマにした研究、談話研究関連の資料、</p>	

また「弁論」をパフォーマンスと捉えたと見られるアリストテレスの『弁論術』も重要な参考資料となった。

受け入れ教授である小林ミナ教授の教室を始め、数カ所で行った発表、会場からフィードバックを受ける機会を得た。小林教授はじめ、談話研究の権威である佐久間まゆみ教授から貴重な示唆を受けた。

以上のような活動を通して得た研究成果の内容としては次の事項があげられる。

まず、外国人による弁論大会における弁論は、特定のガイドラインに沿って行われるという性格上、常に一定に保たれる不変要素と、実際の発表者、聴衆、会場、大会年などによって規定される変化要素を含むパフォーマンスと言える。一定に保たれる要素によって、パフォーマンスの枠組みができる一方、その時々パフォーマンスは実に多様であるが、頻りに用いられた手法に、弁論というパフォーマンスの中に、別の時空で起こったパフォーマンスを引いてくることにより、劇中劇のような構造を作り、パフォーマンスの多次元性を生み出していることが認められた。弁論者の遭遇したことを再現してみせるだけでなく、多くの弁論者はその年に流行った言葉やコマーシャル、聞いてすぐわかる方言などを巧みにひいて聴衆の記憶を喚起し、聴衆から「笑い」という反応を得ている。

文化の捉え方については、76のスピーチから209の文化の捉え方を抽出し、Hammerly (1982) の3種類の文化の捉え方を用いて分類した。3種類の捉え方とはつまり、行動的な捉え方(思いやりをみせる、婉曲な物言いなど)、モノ的な捉え方(食文化、伝統文化、自然など)、情動的な捉え方(経済躍進、地域差など)である。その結果、約60%は行動文化として捉えていることがわかった。年代別では、1960年代には3つの捉え方はほぼ同じ割合であったが、もの的な捉え方が徐々に減ってきた。しかし、2000年代には伝統文化、言語を含むもの文化に言及する弁論が復活している。情動的捉え方も減り続け、2000年代には高齢化やバブルの崩壊を受けてやや増加するが、2010年代では全く見られなくなっている。これに対し、行動文化的な捉え方は1990年代にピークを迎え、2000年代でやや減少するが、2010年代には1990年代に匹敵する割合に回復している。しかし、その内容にはずれが見られる。すなわち、1980年代の終わりから1990年代にかけては、バブルの崩壊による不安感が引き金になったとも考えられる「疎外感」や「排他的言動」が多かったのに対し、2010年代、特に2011年の東関東大震災後に最も多く語られた行動文化は「思いやり」だった。このように、上位入賞弁論のパフォーマンスでは、その時々日本がおかれた状況に敏感に反応していることがうかがえる。

外国人による弁論大会のパフォーマンスという性質上、日本や日本文化に対する提言や期待の表明は常にある。弁論で浮き彫りになった弁論者の姿勢の中で、この割合が最も高かったのがバブル成長期の80年代とバブル崩壊直後の90年代である。80年代には発展途上国に対する政府経済援助額において、日本が世界のトップレベルになった。アジア各国の弁論者のパフォーマンスにはそのような日本に対する今後への期待を雄弁に語るものがあった。90年代には、国際社会における日本の在り方についての提言が圧倒的に多かった。例えば、円高をどう生かすか、「国際交流」の「国際」にアジア・アフリカ諸国を含めてはどうか、国際交流をもっと草の根レベルで行えるのではないかなどである。

全体的には賞賛、羨望、親しみなど、肯定的なものが批判や皮肉、距離感などの否定的なものを上回った。1960年代には羨望や賞賛などのポジティブな視線、1970年代には驚きや不可解さを表現するものが多かったが、バブル全盛期の1980年代にはそれらに代わって他文化との比較や提言、期待の表明、警告が多くなった。1990年からはポジティブな姿勢が徐々に回復してきている。2010年代には、東関東大震災でダメージを受けた日本、日本人を「守る」対象として見ている弁論がある。

弁論の中には、自分と日本との関わりという状況における自己発見や自身の成長を物語るものもある。この傾向は2000年代に顕著となり、2010年にも続いている。

展望:

最も大きな今後の課題は、今回得た研究の成果を日本語教育にどのように反映させるかである。これについてはさらに検討を重ねたい。特に、海外における日本語スピーチコンテストでは、日本国内の弁論大会と異なり、聴衆のほとんどが日本語や日本文化を知らない人々である。このような聴衆を、弁者がどのようにパフォーマンスに参加させることができるのか、これは大きな課題と言える。

また、「ひく」という談話的技術によるパフォーマンスの多次元構造については、アジア学会に於いて発表の要旨が採択された。また、食品や食べることについて「ひいた」例を用いた論文を論文集に掲載し、出版する予定である。